

不登校児の居場所活動実践におけるスタッフの役割  
- 曖昧性の中で「役割」と「くつろぎ」の平衡感覚がもたらす意味 -

立命館大学応用人間科学研究科  
臨床心理学領域

本研究は、居場所活動実践におけるスタッフの役割について、場の特性について触れつつ述べられたものである。昨今の多大な数に及ぶ不登校現象（平成17年度速報では12万3千人）をきっかけに居場所活動は始まった（1985年の東京シュールを先駆けとする）。以来、居場所活動は主に不登校を対象としたものばかりでなく、数多く増えてきている。しかるに一方研究の方に目を向けてみると、その数は実践の多さに比べて少ないように感じられた。先行研究を概観したところ、活動実践を取り扱ったものも大沢（1991、1994）、村瀬ら（2000）などと少なく、実践援助のためには活動を対象とした研究をすることが重要ではないかと考えられた。そこで本研究では居場所を構成する基本要素の内、「人」、なかでもスタッフに注目し、しばしば曖昧（あるいはゆるやか）といわれる役割の実態把握を目指した。さらにそこからスタッフの役割と、導出された役割から見た場の特性についても言及された。

具体的方法として、予備調査で質問紙調査を対象者（スタッフ）に実施し、活動において（しないという意味での共通も含めて）共通する行動特徴を捉えられた。次に本調査として、予備調査で明らかになった行動特徴を元に質問項目を作成し、半構造化面接によって調査が行われた。ねらいは面接調査を実施して本調査で捉えられなかった詳細な行動あるいは気持ちを捉えることであった。最後に、それまでの結果をふまえて総合的考察が行われた。

その結果、面接調査からは9つの特徴（基本的に子どもから誘われたら関わる、控えめな関わり、無理をしない。素直に。気にかける、ネガティブな感情について、引率・指揮（リード）しない、100%ではないが実感できる居心地のよさ、その他1-他のスタッフとのつながり、その他2-子ども・場全体に対する認識・役割意識・スタンス）が抽出され、その背景には更に多様な思惑・気持ちが展開されていることが明らかになった。が、その中でも多くのスタッフが取っている行動・認識が見られ、スタッフの「平均像」とでも言えそうな姿が概括的に把握された。すなわち、スタッフは「子どもとの関わりに即応しながら、時に要求を断ったりしかることもあるが、控えめにかかわりながら子どものことを気にかけている」という役割を担っているということであった。それだけでなく、スタッフは「くつろぎ」と名づけられた特徴も持っており、その「役割」と「くつろぎ」との間で微妙なバランスを取りながら活動していると考察された。一方場に目を向けた場合、そのような曖昧なスタッフの在り方によって、参加者である子ども達がそれまで身に付けていた本音と建前を一旦混在させて、しんどさを場で抱え、再び本音と建前を自らの中で再構築させる可能性が示唆された。また、土居（1975）の義理と人情についての考えを援用し、「役割」と「くつろぎ」について更に考察を進めた結果、役割とくつろぎは防波堤と波の関係であり、それは居場所Aという活動自体にも当てはまると考えられた。そして居場所活動の原点は「一緒に居ること」であり、スタッフは見守りながら一緒にいることが役割であると考察された。